



Data

監督・脚本：ヨルゴス・ランティモス

出演：コリン・ファレル/ニコール・キッドマン/バリー・コーガン/ラフィー・キャッシュ/サニー・スリッチ/アリシア・シルヴァーストーン/ビル・キャンブ

👁️👁️ みどころ

カンヌ国際映画祭の受賞作はアカデミー賞のそれとは異質だが、その常連のギリシャ人監督ヨルゴス・ランティモスの作品は超異質。そんな監督の「奇妙キテレツな映画」が第70回カンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞！しかし、このタイトルは一体ナニ？そして「イピゲネイアの悲劇」って一体ナニ？

サッパリ意味がわからない中、リッチで幸せな4人家族には、マーティンの登場以降、冷淡な不条理劇が次々と・・・。

代表作の『アイズ・ワイド・シャット』（99年）を髣髴とさせるニコール・キッドマンの「大理石のようにひんやりとした美しさ」に注目だが、他方で先に子供を「貢ぎもの」に提供しようとする身勝手さ、理不尽さにもビックリ。

決して後味が良いとは言えないこんな名作も、たまにはしっかり鑑賞したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■カンヌ常連のヨルゴス・ランティモス監督に注目！■□■

1973年にギリシャのアテネで生まれたヨルゴス・ランティモス監督の名を、私は『ロブスター』（15年）を観てはじめて知った。そもそも、『ロブスター』というタイトル自体、日本人にはふざけた感じ(?)がするが、これは高級(?)料理店で時々食べるザリガニのような甲殻類とは何の関係もなし。同作のテーマは、独身者は45日以内にパートナーを見つけなければ動物の姿に変身させられるという、何とも奇妙なものだった(『シネマルーム37』未掲載)。しかし、同作は第68回カンヌ国際映画祭で審査員賞を受賞するとともに、第89回アカデミー賞脚本賞にノミネートされている。また、私は観ていない

が、長編2作目である『籠の中の乙女』(09年)でも、彼は第62回カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門グランプリを受賞しているからすごい。そのヨルゴス・ランティモスの長編第5作目である本作は2017年の第70回カンヌ国際映画祭脚本賞を受賞したため、本作はヨルゴス・ランティモス監督のカヌ3度目の受賞作だ。

カンヌ・ベネチア・ベルリンの各映画祭で数々の賞を何度も獲得している韓国の「奇才」キム・ギドク監督には及ばないものの、脚本にこだわり、奇妙なテーマ(?)の映画ばかり作り続けているギリシャ生まれのヨルゴス・ランティモス監督も奇才の名に値すること間違いなしだ。本作のタイトル『聖なる鹿殺し』も何となく意味シンだが、さてそのテーマは?

本作には私の大好きなハリウッド・ビューティーであるニコール・キッドマンがコリン・ファレルと共演するとあって、その面からもこれ必見!ちなみに、ニコール・キッドマンとコリン・ファレルはソフィア・コッポラ監督の『ビガイルド 欲望のめざめ』(17年)でも共演している上、この2作が同時に2017年第70回カンヌ国際映画祭のコンペ部門選出作に出品されたため、ニコール・キッドマンにはカンヌ国際映画祭“70周年賞”が贈られたそう。新聞紙評でも「最近のキッドマンの作品選びは素晴らしい。特に本作における、ニコールの大理石のようにひんやりした美しさは、代表作の『アイズ・ワイド・シャット』を髣髴とさせる」と絶賛されている。カンヌ受賞3度目となる、そんなヨルゴス・ランティモス監督に注目!

■□■「奇妙キテレツな映画」が褒め言葉!このタイトルは?■□■

『ロプスター』は奇抜な発想とアイデア、そしてヨルゴス・ランティモス監督独特の世界観を際立たせた映画で、私はその寓話性を芥川龍之介の『杜子春』になぞらえて評論した。それと同じように、本作も寓話性が顕著だが、それ以上に本作は新聞批評にも書いてあるとおり、「冷淡な不条理劇」という表現がぴったり。したがって、何事にも論理性を重要視する弁護士にはあまり気に入らないタイプの映画かも・・・。

本作のパンフレットには、高橋諭治氏(映画ライター)の「何もかもが恐ろしい“幸せな悲劇”」と題するコラムがある。そして、そこでは何とヨルゴス・ランティモス監督を「世界中を見渡して今最も奇妙キテレツな映画を撮るフィルムメイカーのひとりである。」と書いているので、それに注目!この表現は最大の褒め言葉だが、同氏は『ロプスター』についても「このようにランティモスの映画は奇想天外な内容のみならず、題名からして人を食ったセンスに満ちている。」と解説した上、本作についても「“ロプスター”がそうであったように、ご覧の通り本編には“鹿”など一度も出てこない。どうしてこんな題名がつけられたのか。」と疑問を呈した上、ギリシャ悲劇の「イピゲネイアの悲劇」について詳しく解説している。そしてそこでは、「ランティモス自身は『ギリシャ悲劇にインスピレーションを得たわけではない』と語っているが、その謎を解くヒントはやはりギリシャ悲劇に

ありそうだ。」と結論づけている。

「イピゲネイアの悲劇」はトロイア戦争に関するギリシャ悲劇らしいが、多くの日本人は「トロイの木馬」の物語は知っていても「イピゲネイアの悲劇」は知らないはず。したがって、高橋氏が解説するほど深く本作が「イピゲネイアの悲劇」に由来している（？）ことは到底理解できないが、とにかく本作も題名からして人を食ったセンスに満ちていることはよくわかる。そんな思いで本作を観ていると、心臓外科医を目指しているという謎の少年マーティン（バリー・コーガン）の登場以降、本作は何とも冷淡な不条理劇へと進んでいくことに・・・。

■心臓外科医の夫と眼科医の妻。その暮らしは？■

私の長男は私と同じ事務所の弁護士だが、その妻も弁護士。そして、長女も金沢で弁護士をしているが、その夫も弁護士。このような弁護士一家も珍しいが、本作の主人公ステューブ（コリン・ファレル）は有名かつ有能な心臓外科医で、その妻アナ（ニコール・キッドマン）も有能な眼科医。そんな夫婦も珍しい。もっとも、わが家の経済力では住む家も知れているが、ステューブ夫妻の自宅はチョー立派。応接間の広さと立派さもさることながら、2人の子供部屋も立派だし、もちろん広い庭も立派。

他方、勤務している大きな病院でステューブは絶大な権力を持っているようだが、家の中では決して暴君ではなく、美しい妻には優しいし、子供たちにも規律をはずさない限度で優しく接している。とりわけ、夜のベッドでの妻への優しさ（奉仕？）のシーンはあきれるほどすごいし、子供に対してもしつけや教育のアドバイスの他、犬の散歩は長女キム（ラフィー・キャシディ）の役目、庭の水やりは弟のボブ（サニー・スリッチ）の役目ときっちり決められているらしい。ボブが1人で犬の散歩に出るにはまだ早いとされているようだが、さてそこらの判断の正当性は・・・？

また、キムは音楽を聞くプレイヤーを何度か失くしているとか、長髪が気に入っているボブが、父親に切るように注意されていながらまだ切っていないとか、ちょっとした問題はああるものの、この4人家族はまさに誰もが羨む理想的な家族だ。しかし、ある日キムがお気に入りの少年マーティンを食事に招待し、家族と共に食事と会話を楽しんだのはいいが、なぜかその日以降この家族にあれこれと奇妙な現象が起きていくことに・・・。

■医療過誤がテーマ？いや、あくまで不条理がテーマ！■

本作冒頭、鮮やかな血の色を際立たせながら、スクリーン上いっぱい心臓手術のシーンが登場する。規則正しくピクピク動いているからいいものの、どちらかというとなんか苦手な私はこんなシーンは苦手。そして、一瞬これは『聖なる鹿殺し』というタイトルからして鹿の心臓かと思ったが、実はそうではないようだ。本作にはステューブの長年の仕事上のパートナーである麻酔科医のマシュー（ビル・キャンプ）が登場するが、ストーリー

一の進行につれて、どうもこのペアは一度心臓外科の手術ミス（医療過誤）をしたらしいことが見えてくる。

そんな医療過誤をテーマにした映画はたくさんあるが、もちろん本作はそうではない。また、本作は前述のように「イピゲネイアの悲劇」にインスピレーションを得たわけではない上、「イピゲネイアの悲劇」に結び付けて鑑賞することを要求しているわけではない。しかし、マーティンの登場以降スクリーン上に次々と不条理な現象が現れてくると、どうしても「イピゲネイアの悲劇」が気になってくる。スティーブンの家に招待された「お返し」に、母親（アリシア・シルヴァーストーン）と2人暮らしをしているマーティンの家にスティーブンが招待されるシーンを観ていると、その不条理さがさらにくっきりと……。また、マーティンの父親がスティーブンとマシューによる医療過誤の被害者であることが明示（？）され、本作にみる不条理はマーティンによるその復讐劇であることが鮮明になってくると、その不条理さはさらにくっきりと……。

ちなみに、本作でマーティンを演じたバリー・コーガンは、クリストファー・ノーラン監督の大作『ダンケルク』（17年）（『シネマルーム40』166頁参照）で英国兵を救い出すため民間船に乗り込む青年ジョージ役で一躍注目を浴びた俳優。そのジョージは好青年だったが、本作にみるマーティンは顔つきや態度はもちろん、喋り方そのものがラストに近づくにつれてどんどん不気味になっていくので、それに注目！

スティーブンがマーティンを気に入ったのは、心臓外科医を目指すと言う彼の心意気にひかれたためだが、ひょっとしてそれ自体マーティンがスティーブンに取り入るための策略？マーティンがスティーブン一家にかけた呪いが最初に現れたのはボブ。いきなりヘナヘナと倒れ込み、以降何の医学的所見もないのにまったく歩けなくなってしまったのは現代医学では説明のしようがないからスティーブンはイライラ。そんなスティーブンに対してマーティンは、家族の中から犠牲者を一人選ぶことを要求したから、すごい。さらにマーティンの呪いの順序は、①手足の麻痺、②食事の拒否、③目からの出血、④死、となることまで逐一冷静に説明したから、スティーブンの怒りは頂点に……。しかし、マーティンが見せるさまざまな不条理な世界に対してスティーブンはいかなる抵抗が可能な？万策尽き果てたスティーブンがライフルに実弾を装填し、ロシアンルーレットのように家族の誰かに当たるようにぐるぐる身体を回すシークエンスを観ていると、その不条理さと怖さに思わずゾッ……。

■□■カンヌでの脚本賞受賞をどう評価？■□■

私はキリスト教の信者ではないが、キリスト教の理解はかなりしているつもり。したがって、キリスト教における「供えもの」や「貢ぎもの」制度（？）の残酷性もわかっているつもりだ。しかし、本作でマーティンが見せる復讐劇（？）の残酷性を見ると、こりゃいかにも不条理……！また、新聞論評で「大理石のようにひんやりとした美しさ」

と称されたニコール・キッドマンも、前半ではベッド上で美しいヌード姿(?)を見せてくれるものの、後半のベッド上で、子供たちを先に「貢ぎもの」にする理由として、「自分たち夫婦はまだこれから子供を作ることができるから」と述べるシーンを観ていると、その身勝手さにビックリするとともにその不条理さにゾッ・・・。

さらに、スクリーン上で現実にはボブが目から血を流しながら死んでいくシーンを観ていると、これにもゾッ・・・。スティーブンが地下室にマーティンを閉じ込め、何とかその呪いを解こうとあがいたのは当然だが、さてその効用は・・・?しかして、「不可解で衝撃的」と書かれている本作のラストはあなた自身の目でしっかりと。

今年のアカデミー賞脚本賞には『ゲット・アウト』(17年)が、日本アカデミー賞には『三度目の殺人』(17年)、『シネマルーム40』(218頁参照)が選ばれたが、この両者にはあまり意外性がなかった。しかし、本作が第70回カンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞したのは多くの人にはきっと意外だったはずだ。それほどカンヌでの賞選びには特徴があるということだが、さて、それについてのあなたの評価は?賛否は?

2018(平成30)年3月8日記